E.SHIBUSAWA

［逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え］

text：渋澤 健

逆境の時こそ、力を尽くす

第4回 外部性を考慮した善い競争

岸田総理は、文藝春秋２月号で「新しい資本主義」のグランドデザインについて寄稿され、以下のお考えを示されています。

「市場や競争任せにせず、市場の失敗がもたらす外部不経済を是非する仕組みを、成長戦略と分配戦略の両面から、資本主義の中に埋め込み、資本主義がもたらす便益を最大化すべく、新しい資本主義を提唱していきます」

市場原理主義の経済学者ミルトン・フリードマン氏が有力視されていた時代では、経済主体の行為や経済活動が他の経済主体に影響を及ぼす「外部性」は、一般的に経済学で無視されていました。極めて効率的、かつ、分かりやすい経済モデルです。ただ、効率性の追求だけでは環境的・社会的課題が生じることが、現在のインターネット時代では誰にでも可視化されるようになっています。したがって、外部不経済を是非する「新しい資本主義」を目指す岸田総理の日本の政策方針は時代の流れに沿っています。

ただ、総理の発言の一部だけが切り取られ、競争や市場を否定するメッセージとして広まるようでしたら、当然ながら、市場から歓迎される政府方針になりません。その影響などで参議院選挙に向けて市場や経済が冷え込むようでしたら、岸田政権に不利な状態を招いてしまうでしょう。

同寄稿で総理から評価されている渋沢栄一の「道徳経済合一説」は、近代化した日本の経済社会において、まさに外部性の影響について先取りしていたと言えるかもしれません。道徳とは、まさに主体の行為や活動が他の主体に影響を及ぼすという教えです。

ただ、栄一は競争を決して否定していませんでした。

「すべて物を励むには競うということが必要であって、競うから励みが生ずるのである」

【『論語と算盤』「競争の善意と悪意」】

一方で、全ての競争が良いという考えでもないと示しています。

「毎日人より朝早く起き、善い工夫をなし、智恵と勉強とをもって他人に打克つというのはこれすなわち善競争である。しかしながら他人が事を企って世間の評判が善いから、これを真似て掠めてやろうというの考ではたの方からこれを侵すというのであったらそれは悪競争である」

【同上】

つまり、栄一が言わんとしていることは、競争は経済社会の活性化に不可欠である一方、競争の定義によって善し悪しがあるということです。

財務的な成果だけで判断され、外部性を無視する競争や市場任せになると、環境が破壊され、格差が広まる社会が生じるという現象は否定できないでしょう。したがって、「新しい資本主義」が目指すべきところは外部性も考慮する非財務的な成果で促す競争と市場です。

例えば、カーボンニュートラル社会を目指す競争を財務的な成果だけではなく、非財務的な環境および社会的インパクト（測定）の成果でも判断されれば、新たなイノベーションを促すルールづくりになるかもしれません。

確かに、言うは易く行うは難しです。ただ、栄一が提唱するように、「善い工夫をなし」「智恵と勉強とをもって」「他人に打克つ」という善い競争は、これからの日本に不可欠です。